上伊那生徒指導研究会 会報

令和２年
３月６日発行

上　伊　那
生徒指導研究会

会報担当
鈴木　利敬

「生徒指導」ということ…

会長　小林　久通

「生徒指導」に対するイメージは、人によって様々だと思います。私たちの年代の「生徒指導」は、荒れる学校、荒れる教室、問題行動をいかに変えていくか・・・が中心でした。中学校間の殴り込みをいかに阻止するかとか、警察から連れ帰るとか、校内暴力を防ぐとか、まさに「体を張って戦う生徒指導」でした。それと並行するようにじわじわと出てきたのが不登校です。私がこの生徒指導研究会に入れさせていただいたのも、当時小学校の低学年を担任していて、学校に来られない女子児童にどう対したら良いかがわからず悩んでいたときに、相談にのってくださりアドバイスをしてくださった先生が、生徒指導研究会の会員だったからでした。今から三十年前のことです。

当時、小平幸春先生が会長で、先生の豊富な経験からの学級経営のお話や子ども理解の様々な方法等、新鮮かつ刺激的で、自分が今まで子どもたちと関わってきた姿勢を見直すきっかけをいただいたことを思い出します。それは本会がずっと大切にしている、「いかに子ども理解をすすめるか」をテーマとして活動してきたからでした。そのたための研修会を大切に位置づけ、バウムテストを学ぶために愛原由子先生をお呼びしたり、カウンセリングについて深く学ぶために大須賀発蔵先生をお呼びしたり、Ｑ―Ｕを学ぶために河村茂雄先生をお呼びしたりと、今、私自身の生徒指導のベースとなる学びをさせていただいてきました。

この流れは、現在も脈々と続いています。現代的な課題である発達障がいや愛着障がいの理解と支援が現場にとって喫緊の課題であると考え、ここ数年は、愛着障がいの研究者として日本の第一人者である米澤好史和歌山大学教授にお越しいただいての研修を積み重ねています。

本会に入会してくださっている先生方は、それぞれに悩みや課題をお持ちの方が多いと思います。ご自分がおかれている課題を出し合っていただき、今後も本会が、「奥深い子ども理解に立脚した生徒指導研究会」としての歩みを進めていきたいと思います。そのことが、多くの子どもたちのためになるのだ、子どもたちを支えることになるのだということを胸に刻みたいと思います。

本年度の活動の企画・運営に携わってくださった先生方、そして、お忙しい中研修会に参加してくださった先生方に感謝申し上げます。一年間の活動、是非、来年度も入会していただき、今後も先生方のお力をお貸しいただきたいと思います。また、新たな会員を発掘していただき、今後も、みんなでつくる研究会にしていきましょう。

（高遠中学校）

一年間の活動を振り返って

事務局　眞島　寿浩

研究テーマ「子どもに寄り添った児童生徒の理解・支援はどうあったらよいか」これは、教育の場にいる先生方は常に意識し、悩んでおられる課題だろうと思います。本研究会は、この課題に向き合い、児童生徒の心に寄り添った支援の在り方について自ら研鑽に努めようとする先生方の熱意に支えられて続けてくることができました。

五月二十二日（水）総会に続いて、長野県教育委員会スクールカウンセラ

ーの小笠原博文先生から「『言ってもやらない』は当たり前」と題してご講演をいただきました。実際によくある場面で、私たちが行いがちな行動について具体例に沿ってお話をいただきました。子どもが期待通りに行動しない時、「なぜやらないのだろう?」と立ち止まり、適切な方法で改善していけるように支援していく。問題行動を起こす子どもも幸せになりたいと思っている。やり方が間違っているだけ・・・まさに教師サイドの姿勢の在り方だと改めて自戒させられる内容でした。

夏期研修会は、十月五日（土）昨年度に続き、和歌山大学教育学部の米澤好史先生から「愛着障害の理解と愛着の問題を抱える子どもへの支援の実際」と題して、発達障害と愛着障害の違い、愛着障害の特徴、愛着修復のプログラムについてご講演いただきました。愛着の問題を起こすよくない対応、すぐに活用できる方法でした。すぐにできること、即実践に生かせることは、私たちにとって大変ありがたいことです。このような取り組みが広がっていけば嬉しいことです。

　会員の先生方のご協力により本年度の事業を推進することができたことに感謝申し上げます。一年間ありがとうございました。

（宮田小学校）

夏期研修会報告

夏期研修係　清水賢一郎

昨年に引き続き、和歌山大学教育学部教授 米澤好史先生をお招きし、ご講演いただきました。

発達障害の理解と支援は確実に進んでいます。しかし、愛着障害に対する理解と支援は十分とは言えません。各校での喫緊の課題となっています。「発達障害だと思って対応していたら、実は愛着障害であった。この子の落ち着きのなさ・攻撃性・過剰な身体接触はどこから来ているのだろうとわからずにいたら、実は愛着障害であった。」等の事例はたくさん報告されています。愛着障害であるとわかった時、それに対する知識と支援の仕方を理解していなければ適切な対応ができません。

　現在、家庭における三つの基地機能（①一緒にいると安心できポジティブな感情になれる『安心基地』②危機に陥った際に守ってもらえネガティブな感情を克服できる『安全基地』③行動の報告共有によってポジティブ感情が増加しネガティブ感情が減少する『探索基地』）が低下しており、今後愛着障害の子どもは増えていくと考えられます。

　講演会では、愛着障害の子どもにしてはいけない指導や対応、基地機能を果たすキーパーソンを中心としたチーム支援のあり方等について、多くの事例をもとに、わかりやすく説明していただきました。また、参加者の質問に

も丁寧にお答えいただき、主体的・対話的で深い学びができました。

今後、保育や学校の現場で、愛着障害の研修が必要となるでしょう。来年度も米澤先生の講演会を予定しております。ぜひご参加下さい。

（飯島中学校）

秋期研修会報告

秋期研修係　**宮澤妙子**

十一月十六日に行われた秋期研修会では、昨年に引き続き、阿南町立大下条小学校長の堀内澄惠先生をお招きし、「子どもの問題行動の理解と適切な支援」と題してご講演いただきました。

「感情コントロールに関わる問題行動」「周囲に影響のある問題行動」「周囲に影響の少ない問題行動」など、日々私達が悩んでいる子どもたちについてのアンケート結果に基づいて、数々の事例を具体的に挙げながら、わかりやすく解説してくださいました。

子どもの問題行動について考えるとき、あれもこれもではなく一つの問題につき一つの対応を考えること、成功体験を味わわせるためにもまずできそうなものに焦点を当てる方がやりやすいとのことでした。

そして、問題行動の理解の仕方として、「先行条件…その前にどんなことがあったか」→「行動…どんな行動をとったか」→「結果事象…その後どんなことが起きたか」を検証する「ＡＢＣ分析」についても教えていただきました。

「先行条件」として環境条件がまずかったり間違った働きかけをしたりすることで問題行動が起きてしまうので、整った環境やわかりやすい働きかけが大切であること。また、問題行動にばしてもも「そんなこと、当たり前」と見逃しがちになってしまうので、基準を下げて二十五％できたらほめることで、本人にとって良い「結果条件」が得られるようにすること。このような教育的支援が必要だそうです。

問題行動を起こす子どもの表情や声や体の動きなどの変化から兆候をつかみ、ひきがねの段階で回避できると楽。活動や居場所を変えたり、ユーモアや深呼吸などでリラックスさせたりして、エスカレートさせない。感情が爆発している危機の段階では、きちんとさせようと思わず安全確保でそっとしておき、深追いしない。沈静化している回復の段階では、感情は傷つきやすく混乱しているので、不用意な介入はしない。対応の仕方のポイントを教えていただきました。

また、自分の思いを言葉で表すことができず問題行動へと移行してしまうことが多いので、気持ちを消化できるようにするためにも、マイナス感情やプラス感情の語彙をもつこと、「惜しい」「残念」などあきらめる（気持ちを切り替える）語彙をもつこと、教師が「～しようとしてたんだよね」「それは～っていう気持ちじゃないの？」と代弁してやることが大切だそうです。

何より、叱るより褒める・認めるが大事であること。「最初から完全を求めない」「子どもは自分を見てもらいたい」「良い行動をしても認めてもらえないと、悪い行動で見てもらおうとするようになる」日頃から胸に止めておきたいお話でした。

最後に、グループに分かれて「ＡＢＣ分析」と「十五分解決法」の演習を行いました。実際にやってみて、いろんな先生方から意見をいただくことで、解決策が見えてくることを体感し、ぜひ自校でも取り組んでみたいと思いました。

（飯島小学校）